

りなく、「只今戻りました」と玄関を開けますと家族は夕食を食べていました。親父がいないので聞いて見ると、一日も早く復員するようにと近所の人と共に占いに行っていると言う。

翌朝、親父が帰って来て「やっぱり帰って来たなあー」と。占いでは「明日にでも帰って来るから安心していなさい」との事だったそうです。私は無事復員することができましたが、第三男はシベリアに抑留され、その後の消息がわからないと言う。

その後も親父さんはじめ家族の心配は終わらない毎日でしたが、終戦三年目の最後の復員船で弟も帰って来ましたので家族一同喜び合いました。

北支の想い出

滋賀県 山元重一

私は、大正十二（一九二三）年八月二十四日、旧栗田郡治田村下戸山の農家の長男として生まれ、弟三人姉三人の七人兄弟の四番目でした。父は農業は米を主体に、畑には愛知トマト会社と契約してグリーンピースの栽培をし、母と姉が手伝っていました。当地方はグリーンピースの産地として有名ですので、私は学校を卒業すると、満鉄の機関車の部品を作っていた大津市の東洋レヨン株（当時、現・東レ）の機械課に勤めながら、両親の農業の仕事を毎日朝晩と日曜日にも手伝いをしておりました。

昭和十七（一九四二）年ともなると、太平洋戦争の戦局も刻々と拡大し、私たちの会社には舞鶴海軍工廠より、魚雷の部品の検査ゲージの製作などを受注するようになりました。

昭和十八年七月、兵隊検査で甲種合格となり入隊の日を待っていました。戦争は毎日、ラジオニュースは戦勝の報道で、連日「勝った、勝った」で喜んでいました。しかし欧州戦場ではドイツ軍が苦戦をし、イタリアは英米連合軍の上陸を許し、九月には三国同盟国のイタリアが連合国に対し降伏したのでした。

東部戦線のソ連軍は、冬季に入るや俄然勢いを盛り返して大攻勢に転じ、ドイツ軍はジリジリと追いつめられていました。

米英支の三国首脳はカイロで会議し、太平洋戦争終了後における日本の処理問題に付いて、談合すると言う余裕すら見せていました。

南方戦線においては報道ニュースとは裏腹に、日本の海軍力も航空戦力も圧倒的に連合軍に凌駕されて、南方諸島の日本軍は至る所で苦戦を強いられていたのです。国内では国民総動員で婦人の方々も、敵の上陸を想定して竹槍を持って、これに立ち向かうべく訓練をされていた状態でした。

しかし支那大陸戦線だけは、至る所で苦戦はしたものの、各所で戦果を上げ、後程の敗戦になるなどとは夢にも思っておらず、「戦いつつ建設」と言うことで国威を鼓舞していました。

私はこのような戦局になった昭和十九年一月十五日、京都伏見区桃山町の中部第四十一部隊工兵第五十三連隊（第十六師団工兵隊）に入隊しましたが、本来は北支派遣第六十二師団工兵隊（石部隊）の要員でしたので、約二週間程はこの部隊に客分としておりました。正月というので毎日家族や親族友人等が面会に来て、酒保で談笑して懐かしい日々を送りました。

入隊と同時に、石部隊より初年兵受領に来た山口軍曹殿の指揮下になり、私たち四十八人は「石班」と言われました。そして戦地の原隊に行く間、ここで軍隊生活が始まりました。

起床ラッパで飛び起き、点呼と軽い体操、駆け足そして朝食、食事が終わると練兵場での訓練で

した。休憩をしている時には、前方右上の鉄橋を通る奈良電車(現・京阪電車)を見て、「ああもう、この電車に乗ることはできなくなるのか」と思ったりしました。

こうして軍隊で初めての正月を迎えました。正月の日曜日には父母、姉、弟妹、家族全員が面会に来て、ボタ餅を沢山もってきて、皆で食べ、これが家族との最後の別れかと、一人一人の顔を見つめました。

その時、母は涙ぐんでいたようでしたので、小さい声で「我々は北支方面やで、安心して」と言ったら、母は「うんうん」と安心したような顔で頷きました。

正月も終わりになったところ、いよいよ出発の準備です。

一月二十九日、夜の点呼の時班長殿が「明朝、非常呼集があつたら直ちに、軍装をして営庭に集合、出発できるように準備をしておくように」と

言われ、私たちは私物の整理や軍衣袴の点検等をして寝床に入りました。そして私物で必要ないものは、まとめて実家に送りました。

午前〇時、非常呼集が発令されました。私たちは、支給された防寒用の被服に着替えて「初年兵は直ちに営庭に集合せよ」と命令され、現地から迎えに来ていた原曹長の指揮で、各中隊ごとに営庭に整列、まだ夜明け前の薄暗い夜道を京都駅まで行軍し、列車に乗せられ下関港へと向かいました。

駅までは行軍、奈良電車に乗って京都駅に到着する。駅前の栗石の敷いてある広場に座って約一時間余り待っていました。この頃は、戦地へ行く行動は隠密裡に行うようになっており、駅前には誰一人通る人もいませんでした。冬の夜空からは小雪が舞い降り寒く、今でも思い出されます。

京都駅を午前三時出発とのことでしたので用便を済ませようと行く途中、同級生の奥村保男君に会い、吃驚しました。奥村君は通信兵で、私たちと

同じ位の人数で北支行きで、しかも同じ車両でした。小学校卒業以来の初対面でしたので、思い出話をして行きました。列車は下関で下車、下関より小さな船で釜山へ向けて出港しました。

船は貨物船で船底には馬を乗せ、その上はすし詰め状態で、エンジンの音が耳に入りなかなか眠れない状態でした。甲板より日本の島がだんだん小さくなって行くのを見て「もうこれが故国の見納めか」と思うと、目に熱いものを感じました。

船内に入ったら玄界灘の荒波に揉まれ、皆船酔いで悩まされていました。うとうととしているうちに船は朝鮮の釜山に入港、上陸すると夕食となりました。しかし船酔いのため何も食べられず、残念でした。

また列車に寄せられて朝満国境を通過、窓の外は雪に覆われた山並が見え、気温は零下三〇度とか、吐く息も白く、用便所は氷のツララとなっています。京都を出発してから十日目に、凍りつく

寒さの中を列車はやがて満支国境山海関を通過、万里の長城を望みながら山西省の榆次に到着しました。

山西省の二月は非常に寒く、零下二、三〇度の寒さです。榆次というところは山西省の大都市・太原の東約三〇キロのところ、夜になると西の方向の夜空が明るく見えていました。

ここに連隊本部がありました。直ちに各中隊へと配属され、古参兵の待っていた第二中隊第一分隊員となり、中国の民家の兵舎に入りました。山西省というところは山また山、見渡す限り山ばかりです。しかもここは海拔二、〇〇〇メートルの高原地帯である。寒さは一層厳しく、いよいよここで軍隊生活の第一歩を踏み出すこととなりました。

入隊前、内地では会社でも多少の軍事訓練は受けていましたが、内務班のことは初めてであり、戦地のことなのでへまをすれば別ですが、それ程

厳しい教育はありませんでした。

我が部隊が駐屯するこの街は、約一キロほどの城壁で囲まれ、城内には家が密集していて、商店や露店がいっぱい並んでいました。毎朝点呼後は、城内を駆け足で一周すると体が暖かくなりました。

榆次の街に来て四日目の朝、二列で駆け足をしていると、班長から急に「一列になれ」との号令がありました。何だろうと思つて前方を見ますと全裸の中年の男が下向きになって寝ていたのです。中国では死亡者を見ると着ているものを全部剥ぎ取ってしまうとのことで、それで裸にされていたのです。

私達工兵隊は、歩兵のような直接の戦闘要員ではなく、土工、爆破、橋造り、あるいは船漕ぎ等が主任務で、一番教育で苦労したのはこの船漕ぎの技術でした。水上では竿一本、カイ一本で、右にも左にも回転するので、その力の入れ具合がコツですが、船など漕いだこともない私には、その

コツがどうしても会得することができず、どやされたものでした。

二月二十日頃と思います。操舟訓練のため鉄舟や折り畳みのゴムボートの運搬、操舟訓練がありました。私は山育ちで非常に難しく困ってしまいました。

二月末の北支は寒さが厳しく、手が思うように動かないので、舟はだんだん流されてしまい、訓練が終わって班長からビンタを頂きました。

就寝後にいろいろと考えて、人事係の准尉殿を訪ね「工兵隊は無理です。別の技兵を志願したい」旨をお願いしましたところ、「今、衛生兵を募集中なので、衛生兵に行つてくれ」と言われ、その日の訓練から帰って来たら、私は第一班に決定し、第二班は京都出身の鍋師良男君が決定したと聞いて、喜び合いました。

それで一期教育も即成で六カ月のところを三カ月で終了し、今度は三月一日より、山西省路安に

ある陸軍病院で六カ月間の教育を受けることになりました。

鍋師君と二人で汽車に乗り、山西省榆次の工兵隊に戻り報告し、翌朝二人で出発、蕪安には夜の十時頃に到着しました。蕪安の駅には、蕪安陸軍病院の兵長殿が迎えにきていました。案内されて教育班第六班に配属されました。班付は豊浜兵長殿でした。机の上には上等な食事が並べてあり、寝台には暖かい蒲団が敷かれていました。

衛生兵教育は六カ月の予定でしたが、部隊移動のため四カ月で終了しました。石部隊は、もう英河を渡った所まで前進していましたが、部隊の司令部へ行き、原隊復帰を部隊長に報告しました。そして被服係より陸軍衛生一等兵の襟章と胸章を付けて貰いました。

昼は線路上を動哨したり、食材集めや、熱発者、故障者の介抱などをしていました。そうこうしている内に、原隊復帰の三日目に午前十一時、出発の命令ができました。昭和十九年七月二十三日でし

た。出発後、三時間ほど歩いた時、頭が痛くなり、足が上がり倒れてしまい、軍医殿の診察で入院することになりました。そして河南省の開封陸軍病院に入院となったのですが、病院に到着した頃は気持ちもよくなり、同行の古参上等兵殿に「もう大丈夫」と言われたのですが、入院の手続きをして行かれました。病名は知らされず、八月十日には悌徳分院に転院しました。

そこを退院後は、北海道の旭川師団の北部隊工兵隊付衛生兵として勤務することになりました。医務室には板倉軍医中尉、田中兵長、津村上等兵、野崎一等兵そして私の五人でした。野崎一等兵は補充兵でしたが、一カ月後には森一等兵が来て六人体制になりました。

十一月に田中兵長は伍長に任官、私たち一等兵三人は上等兵に進級しました。そして十一月末には、部隊は河南省南陽攻略戦のための重砲の道路造り、橋造り、警備などで大変でした。重砲は初

めて見ましたが馬十二頭引きでした。南陽の城壁近くへ進撃し、歩兵部隊と工兵隊が一緒になって攻撃します。野戦重砲は一キロ後方から攻撃するので、我々の頭上を物凄い音を立てて飛んで行き、城壁を破壊します。敵はトーチカよりチェッコ銃で抵抗、我が軍も重機関銃等で応戦します。私は初陣で、いろいろと注意されました。

その時「衛生兵前へ！」と呼ばれます。自分が駆け足で前へ行くと、二〇メートル先に奥井一等兵が左足貫通銃創で倒れている。右足を引っ張り、少し低い所で止血、破傷風注射をしていると、横に大谷上等兵が頭、山岡一等兵が腹の貫通銃創で即死しているのです。こうして工兵隊第三小隊七十人中、三人の死傷者が出ました。

日暮になって城内に突入すると、中国兵の死体があちこち散らばっており、ここで大谷上等兵と山岡一等兵を火葬にし、奥井一等兵は後方へ護送しました。

昭和二十年三月、牛綿作戦に参加しました。この作戦任務は、戦車の道路・修理、橋の修理・補強及び警備でした。一週間ほど道路の補修作業をして牛綿に向かって行進しました。食糧は自給自足、全員疲労状態のところへ、敵は戦車に向かって攻撃をしてきました。右前方を進んでいた我が戦車が、地雷を踏んで大きな音ともに飛び上がり、止まったまま戦車砲で応戦をしている。この戦闘で我が方は戦死者三人、負傷者八人の犠牲を出し、翌日午後、牛綿城に入城しました。

三月十八日、軍医殿から「新郷陸軍病院（第一六八兵站病院）に転属」の命令を受けました。中谷曹長以下十五人が一緒に出発、三日後に新郷駅に到着しました。

私は内科病棟の受付係と内科部長の当番兵を命ぜられました。四月一日、准尉殿に呼ばれて、兵長に進級し、栗本病院長の当番兵を命ぜられました。そして病院長の当番兵であった吉田兵長から仕事の申し送りを受けました。

かくして、軍隊に入隊し、衛生兵長となったことを思うと、会社に行っていた時より毎日が楽しくてなりませんでした。しかし戦局は刻々と悪化し、南方の島々からは玉砕の報が聞かされるようになり、満ソ国境も動揺が見られました。そして本土も主要都市は空爆により焼け野原と化し、遂に八月十五日「全員、体育館に集合」と命ぜられ、ラジオの放送を聞くこととなりました。

命令受領に行っていた松井伍長が終戦となったことを病院長に報告、病院長は将校全員の集合を命じて、下士官、兵には教育隊長より終戦になった旨を伝達されました。そして中国兵が病院を管理運営することになりましたが、病院の勤務内容は何も変わらずでした。

昭和二十一年三月、帰国準備に入り、病院内の練兵場に各自の携行私物、その明細書を並べて中国側の検査を受けました。病院には患者がいまいたが、次の部隊に申し送り、三日後に新郷陸軍病院を出発、新郷駅より列車で上海に向かいました。

当時の人員は、軍医、薬剤師、衛生、歯科、療工、医療関係者約三百五十人、看護婦五十人、北島軍曹以下陸軍兵（警備）五十人、その他軍属・通訳約四百八十人程度だったと思います。

上海に到着して近くの空兵舎で休憩していると、訓練隊長から上海第一陸軍病院へ転勤を命ぜられました。そして皆が帰還をしたのですが、私は上海第一陸軍病院の第六病棟（内科）の被服物品の係長を命ぜられました。そこには約一千人位の入院患者がいました。

上海第一陸軍病院は東洋一の大病院と言われ、入院患者数は約一万人とか言われていました。

昭和二十一年六月二十九日、いよいよ私にも復員の命令があり、上海の陸軍病院を出発、上海港より艦砲を取り外した海防艦に乗り、翌三十日には日本の島影が見え、佐世保の海上に停泊しました。

思うに、あの第一線での戦場では、幾多の戦友

が白木の箱に収められたことを考えると、元気で帰国できた喜びは忘れられません。検疫は鹿児島で行うこととなり、船は桜島の近くに約一週間停泊しました。暑い晴天続きの甲板上では、何もすることなく、ただ早く帰りたい一念でした。鹿児島港に上陸後、頭からDDTを全身に掛けられ真っ白になりました。

各自には行く先の書いていない切符と携行食パンと黒パンを貰って、戦友五人で、七月十三日、草津駅に二泊三日掛かって到着しました。自宅までは五キロ、駅前で自転車を借り、家路へ走りました。

いろいろ思うこと

衛生兵は病院に行つて、負傷者の手当をすればよいものと思つていましたが、そのような甘い考えはとんでもない、歩兵の方と一緒に第一戦で弾の来る中でも、負傷者が出ればこれを処置しなければならぬ任務があつたのでした。

中国には親日の新政府王精衛軍という部隊があり、その部隊が各部落の防衛のため部落ごとに自警団を組織して、部落民の婦女子が退避するまで防備していました。しかし八路軍等の襲撃があるとすぐ我が軍に応援を要請してくるのでした。

ある日、夜明け頃、まだ宿舎で眠っていたら、タタタタターとまるで豆鉄砲のような音で目をさました。分哨の者が「敵襲！ 応援頼む」と駆けつけて来ました。「それっ！」とばかりに飛び起き、銃を片手に表に出て見たら、八路軍が歩哨を自動小銃で撃つたため、歩哨は蜂の巣のごとくにやられたというのでした。

早速、駆けつけて見たのですが既に息がない。何ともむごい事と思つたのですがどうすることもできず、友軍はこれを撃退したので、穴を掘り遺体を埋めて、ご冥福を祈りました。

この時の不意の襲撃では、我軍には死者一人、負傷者三人程が出ました。しかし八路軍の死体は五、六人ありました。また自警団の中にも数人の

負傷者があつたようでした。中国では当時、省が違つとそこに住む人間感情が違つたので、古来から省の違つた住民の争いというもの、しばしば行われていたと言われているのです。昔の我が国の戦国時代のころと同じでした。

そのために山西省の部落構造は、部落全部を土塀で囲み、部落の前には田園には稲を刈り取つた跡、水を張つて敵の侵入を阻止すると言う方策をしていたのでした。部落に入るには限られた田園の細い道しか通れないのです。

我らの工兵隊も牛綿作戦に参加、前進しました。私は新郷陸軍病院へ移動して、昭和二十年八月十五日、各部隊からの命令受領の集合があり、何事だろうと思つていたら、日本は無条件降伏をしたと言つた。これを聞いた時、誰一人として声もなく、ただしばらくの間茫然とし、次にはすすり泣く声があちらこちらに出て、ぼろぼろと涙を流して泣きさげぶる者も出る状態となりました。我々はこの先どうなるんだろう。皆にはそんな

不安がありました。誰一人として昼食の準備をする者もなく、一日を空しく過ごした翌日に武装解除と言うので、一切の武器、医薬品まで中国正規軍の前に出し、そして抑留生活となり、昭和二十一年九月鹿児島港に上陸、故国の土を踏んだのでした。

上陸して見ると本土の都市はほとんど出征前の姿は無く、無惨な焼野ガ原と化し、戦争は大自然も破壊し幾多の人命をも犠牲にするものであることを痛感しました。戦争というものは、子々孫々に至るまで味あわせたくないと思念するものです。

烏合の衆に思うこと

昭和二十一年六月三十日、上海第一陸軍病院を出発して四列縦隊で上海港に向かう時のことでした。行進中、前の方で隊列が乱れているので、何事かと見ると、中国人の窃盗団が……二人組、三人組、若い者、老人、子供、中には女性も、約四、

五十人位が、日本軍人の隊列の中へ入って、各人の持ち物を奪い取っているのです。

昼日中、堂々として五百人もの日本軍人に対して、盗みを働く中国人の行為に対して、敗残兵になつたとは言え、誰一人として、この行為を止める者もなく、ただ見ていてだけです。

考えられることは、日本軍は戦争中は食糧調達のため、彼ら中国人の飼育している牛、豚、鶏などを盗み、家屋には放火、殺人などあらゆる悪事を働いて来た事を思えば、彼らの窃盗位は小さいことでしたが、皆これに逆らう者がいなかったのです。

そして上海港より乗船、出港すると、甲板では四人、五人の集団が車座になって酒を酌み交わし、大声で軍歌を歌う。各自持参した酒を飲み、なくなるまで薬用アルコールを静脈注射して騒ぎ出す。乗船しているのは衛生兵と軍医、薬剤師ばかり、ただ彼らのことは見ているだけでした。

やがて翌朝、日本の山々が見えて来た時、一人の人が息はしているようでしたが、顔面は蒼白で、誰が見ても死の直前の様子。前夜一緒にいた方々は誰もいませんでしたので、その場所だけ広く、一人で苦しんでいたようです。

その時、私は五メートル位離れた所から見ているのですが、軍医、下士官も見えているだけでした。翌朝、間もなく息を引き取りましたが、何の連絡もなくそのままでした。

そのうち船員が担架を持って来て死体を毛布で包みロープで結んで船の外に出していました。

自分の都合の悪いことは見て見ぬ振りをし、自分だけ良ければと思うようになった旧軍人精神の浅ましくなったのには残念でならなかったものです。